千里金蘭大学紀要　14　13－20（2017）

〈原著論文〉

身体と学びに関する社会科学的諸理論の比較と検討
―対人関係論と身体技法をてがかりに―

Comparisons and consideration on social science theories about bodies and learning

江南　健志[1]，吉田　梨乃[2]

要旨

社会科学における身体論は、身体を心身二元論の視座から客観的に捉えるではなく、生きられた身体として行為者の経験から読み解き、再構成する方向にシフトしつつある。そこで本論では、学びのフィールドでの経験から、身体に関する社会科学上の方法論を概観するとともに、定性的記述における心理学と社会学の方法論的架橋を目指す。そして、学びの現場における身体技法の限界と可能性について考察を加える。

キーワード：身体論，心身二元論，対人関係論，身体技法
body theories, mind-body dualism, the interpersonal Theory,
body techniques

1．はじめに

私たちが何かをおこなうとき、その行為をどのように説明するだろうか。例えば、「腹が減ったから食事をした」とか、「寒いから服を着た」と他人に説明したとする。その説明を受けた人にはとても説得的に聞こえるはずである。また、なぜそうしたのか、それを行為者自身の意図や意識に還元すればより説得力を増す。つまり、説明に説得力を増すためには、その言明の裏側に「自分がこれをしたいから」という明確な意思や意図が見いだせるからである。また、このような言明は、いつ、どこで、誰が問うても同じ答えが返ってくるはずである。それは本音だとか、真意という言葉で自明かつ永遠のものとなると考えている。

このような説明の仕方は、いわゆる近代科学としての手続きを踏む場合、支配的な認識枠組みとして存在している。〈原因－結果〉で事象を説明する仕方、または客観的で実証的なデータを示す方法、行為を行為者の思考や意志に求める見方を実証主義と呼ばれる。社会科学においても実証主義的な説明は支配的な地位を得ている。本稿で議論の俎上に挙げられている心理学と社会学もまたしかりである。

しかし、1970年代以降、このような客観的に捉えられる社会や人間のあり方、まなざしを批判的に捉え、世界の変化を行為者の主観的な意味世界の変化と捉える立場を提唱する議論が台頭してきた。その代表例が現象学であり、エスノメソドロジーであり、シンボリック相互作用論などである。このような思潮は、心理学と社会学の両分野においてそれまでの支配的であった方法論に疑問を投げかけ、日常の生活や行為を行為者の内面から切り取ることを可能とし、従来の研究のあり方そのものを問い直すきっかけとなった。

本稿では、このような行為者の内側からの意味世界の認識という視座から、昨年から継続的に観察している吉田ら（2016）の調査フィールドであるシステマ親子クラスに集う人々が「システマというマーシャルアーツをする」ことの主観的な意味世界をすくい取る方法論を探ることを目的とする。そのため、まず社会科学における二つの大きな認識方法、つまり実証主義と構築主義について概観する。その次に、今日に至る身体論の経緯を説明し、心身二元論から離れて主観的に身体を記述している幾つかの事例を紹介する。最後に、筆者らのフィールド調査と同じく武道やマーシャルアーツという技や身体操法を習得する時の行為者

1　Kenji ENAMI　千里金蘭大学　生活科学部　児童教育学科
2　Rino YOSHIDA　東京学芸大学大学院　連合学校教育学研究科
受理日：2017年９月８日
査読付

の主観的意味の変化を記述している社会学的研究を紹介し、筆者らの研究への応用可能性について考察する。

２．社会科学における社会の認識方法
－実証主義と構築主義－

心理学と同じく、社会科学の一翼を担う社会学においては、社会や人間といった対象や現象について一般化され、普遍化された説明が求められる。また、それらの説明を精緻にするためにも比較や計量的実証的な分析が重要視される。それは今日においても、社会学の中で有力な分析手法であり、科学的かつ論理的であると捉えられているが、そのような論理的な説明の代表の仕方は実証主義と呼ばれている。

一方で、これらの手法が自然科学や生物科学の方法論をモデルとして発展しており、社会科学においては行為者の意識・動機や発言・行為を数量化して実証可能なものとして社会的リアリティを重視する。しかし、そのような客観的な事実ではなく、そこに生きる人々が与える主観的意味を再考することを主張する立場も存在する。この視点をとれば、社会的リアリティとは意味ある社会的相互作用の産物であり、単に客観的因果関係に帰結しないことになる。このような立場を一般に構築主義と呼ぶ。

実証主義／構築主義の議論は、1970年代以降の現象学、シンボリック相互作用論、エスノメソドロジーなどの勃興とそれまで有力であった構造－機能主義との間の相克に端を発する。

以下では、実証主義と構築主義について詳細に見てみたい。なぜなら、両者の違いこそ、身体活動を捉える視点の違いと強く通底するからである。

2-1. 実証主義

山本雄二（1990）は実証主義と構築主義の特徴を以下の二点に求めている。

一つ目は、現実は互いに因果関係で結びつけられる複数の現象でなりたつ点にある。ここで言われていることは、現実の社会事象が〈原因－結果〉モデルである事象が表すことが出来るならば、それは普遍的な記述が可能であり、それは科学的法則であると捉えることが出来る。しかし、現実社会の諸現象にかんする命題を、例えば実験的に確かめようとしても、それは倫理的にも技術的にも出来ない可能性が高い。それゆえ、現実的な議論をすすめるためには確率の手法が導入され、定量的調査によるデータ収集が重用されることとなる。

このように実証主義は科学的であることが求められるが、その仮説の構成とテスト方法が科学的でなければならない。その点に関わるのが二つ目の、〈リアル〉なことはただその存在を経験的証拠によって示すことが出来る限りにおいてリアルである点にある。とくに重要になるのが『経験的証拠によって示す』ということであると説く。山本（1990）はさらに３つの段階に分けて経験的証拠について考察を深めている。

第一に、全ての現実は『語られうる』、すなわち言葉によってカテゴリー化されなければならない。第二に、経験的証拠はいつ、どこで、誰が見ても条件が同じならば同じ結果を提供するはずであるので、測定・計測できるものに移しかえられなければならい。このような経緯はコンセプトの〈操作化〉であり、簡単に言えば理論的な〈変数〉を観察可能な〈指標〉に変換することである。第三に、このような実証主義では経験的に確かめられることのできる言明のみに意味を認めようとする。つまり、検証の方法が示されない言明は無意味であり、そのような無意味さを極力排除することに実証主義は根ざしているのである。

このように、検証可能なデータや言説をもとに科学的方法論として確立した知を前提とすれば、社会科学と自然科学とは同一の地平において科学と言える。しかし、自然現象の測定や同一条件下での実験をもとにデータを得られる自然科学とは異なり、社会や生活の中でそのような測定・実験などが必ずしも実施できると限らない社会科学において、自然科学的方法論を常に取ることは困難であり、その点では上述の実証科学的方法論によって社会現象を全て説明できるわけではない。次に、この問題点を超克する方法論として、構築主義について見てみる。

2-2. 構築主義

社会学の伝統の中にも、人間の社会は自然現象と違い、自然科学をモデルとする実証主義では上手く説明できないとする考え方があることを指摘する。その代表例として、M.ウェーバーの理解社会学や現象学的社会学、シンボリック相互作用論、エスノメソドロジーなどを挙げている。山本(1990)は、実証主義と構築主義（山本はこれらの方法論

を解釈主義（interpretivism）と呼ぶ）との違いについて述べているが、本稿では特にデータの問題と客観性の問題について取り上げておく。なぜならば、実験や観察などから得られたデータを同読み解くかという点にこそ、実証主義と構築主義の立場の違いが鮮明になるからだ。

解釈主義によるデータの問題とは、実証主義では変数間の因果関係を測定するものとしてデータを捉えているのに対して、解釈主義では行為者の現実規定ないしは現実規定の方法を理解しようとしている点の相違にある。一般に解釈主義と呼ばれる立場では、数量的データよりもインタビューや参与観察によって得られるデータに重点が置かれるが、それ以上に重要なのが、逆説的ながら他者との対話の困難性に直面するときであるという。相手のことを知らないだけではなく、相手の生きている世界が自分の生きている世界とはまるで違っている感覚こそが重要であり、そんな時にこそ社会学的な理解は自己の世界に固執することをやめるように調査者に迫るという（山本，1990）。

また、客観性の問題については次のように説明している。解釈主義の立場を取る人たちは、世界を理解するということが行為者の見ている世界を理解することであると考えるという。しかし、それならばいかにしてそれが客観的説明であることを保証するのかという疑問に突き当たる。しかし、その疑問に対する一つの説明として、次のような主張がなされることがある。ある社会的リアリティについて説明する行為者の言説は世界にある意味を与えるものであるのと同様に、社会学者のそれもまた世界に意味を与えるもう一人の行為者にほかならない。それゆえ、普通の行為者とおなじように他の社会的行為者との相互作用を取り結ぶことによって世界を解釈し、意味を帰属させている。そうした理解が他の説明と比べてより客観的に正しい説明であると主張する根拠は何もない。

この観点からすれば、社会学者が提示出来る唯一の説明は『主観的』な説明であり、またそれでよいということにもなる。しかし、ここでいう主観性は必ずしも『独断』を意味しない。独断は、自分の理解を唯一の正しい理解だと信じるがゆえに独善でもある。主観的であると認めることは、自分の理解が相対的なものであると認めることで無くてはならない。そこで、解釈主義に立つ場合は、自分の理解を相対的なものとして対象化し、それがいかなる意味で相対的なのかを明示することが社会科学としての『客観性』を保証することだといえる。それゆえ、実証主義のいう客観性とは全く異質であり、却下先生に関する実証主義と解釈主義のこのような相違こそが、『社会』に関する認識の違いを端的に表しているという（山本、1990）。

2-3. 実証／構築の相克と身体論

さて、実証主義と構築主義の違いが『社会』に関する認識の違いであることを示したが、それは単に社会のあり方のみに求められるのではない。それが行為者の認識する世界全てに敷衍化して捉えることが出来る。例えば、それが仮に『痛み』という行為者にしかわからないリアリティであったとしても、それを痛みの程度を何らかの尺度によって測定するという定量化の手続きを踏んでデータ化されるとするならば、それは山本が説明したように、経験的証拠がどこで、誰が見ても条件が同じならば同じ結果を提供するために測定・計測できるものとして定量化されれば、それは実証主義的アプローチに依拠した社会の把握となる。このような把握の仕方を研究対象の実体化と数量化とすれば、人間の身体活動をテーマとする社会学に関して最初に取られるアプローチは、近代西洋思想、ひいては自然科学に色濃く見られる心身二元論から発していることは想像に難くない。

社会学という分野において身体というテーマは議論の俎上に挙げられてこなかったが、昨今では身体というテーマが大きな場所を占めつつある。その一例として、セクシャリティの社会学、医療・健康社会学、スポーツ社会学、ドラマトゥルギーの社会学、などである。次章では、社会学上で展開されている身体に関する諸議論についてたどってみたい。

3．身体の社会学の変遷

3-1. 身体論の系譜

前章では、社会学における行為者や社会のもつ諸現象をどのように切り取るか、その視点・態度として実証主義と構築主義の特徴と違いから論じてきた。それは、取りも直さず行為する人々の身体をどのようにして見つめ、捉え、そして記述するのかという研究者の立脚点と密接に結びついている。本章では、社会学の研究対象としての身体がどのように眼差され、記述されてきたのかについて概観する。以下では、伊藤（1991）の説明を

もとに身体の社会学の流れについて見ていきたい（表１）。

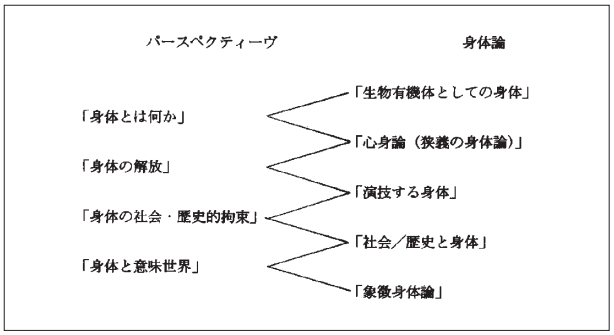

表１：社会学における身体論とパースペクティーヴの関係（伊藤（1990）p.7から抜粋）

1970年代から1990年に至るまでの社会学と身体論との出会いをめぐる議論のために、パースペクティーヴと身体論の関係を時系列にまとめて、パースペクティーヴと身体論が微妙にオーバーラップするとともに、議論を色付けする基礎を構成するとしている。まず、パースペクティーヴを４段階に順に設定して、身体そのものの存在を哲学的かつ科学的に問題にする『身体とは何か』という視点、身体をいかに開放するかをその立脚点にした『身体の解放』の視点、『身体の社会的・歴史的拘束』の視点、『身体と意味世界』の視点から身体論と関連付ける。次に、身体に関する議論としては、『生物有機体としての身体』の議論、『心身論（狭義の身体論）』、『演技する身体』の議論、『社会／歴史と身体』の議論、『象徴身体論』の５つを設定して、その関連から社会学における身体論の系譜を紐解いている（伊藤，1991）。

さて、身体論の潮流の中で重要なのが実証主義との関連が強い『心身論』から『社会／歴史と身体』の議論への流れであろう。伊藤（1991）によると、無限の精神と有限な肉体、崇高で永遠の精神／精神の崇高な作用を妨げる肉体といった心的なものと身体的なものを区別する心身二元論の超克は二十世紀の思想において最重要の課題であったという。そして、『客観』への疑問視、世界・内・存在、生きられる身体といった視点からこの心身二元論の克服を目指したという。

次に、演技する身体について説明する。会陰着という観点と社会学との関連といえば、社会学者にとってはクーリーやミード、ゴフマンなどの論者を挙げることが出来る。中でもゴフマンが『日常生活における自己提示』『スティグマ』から『フレーム分析』まで、身体と演技という問題をめぐっていまだに強い光を放っており、コミュニケーションという観点から、ボディコミュニケーションや身振り論と言った問題も議論の対象になっているという。

ここでは、ゴフマンのドラマトゥルギーについて簡単に記しておく。ゴフマンは様々な概念を用いて人々の日常生活を分析したが、特に人と人とが居合わせた場所は、そこに存在する人々がある種のパターンやルールに従うことによってなりたつことに気づいた。このようなパターンやルールを「相互作用秩序（相互行為秩序とも呼ぶ）」と呼ぶ（西川，2003）。

速水（2005）によると、ゴッフマン[1]と身体論の関係は次のとおりとなる。ゴッフマンの研究領域は一貫して身体を介して居合わせる状況である。この一定の状況に投企された身体を考察対象とし、相互行為秩序がいかに生成、維持されているのかを分析することにあるという。

しかし、ここで但し書きとして注意したいのは、「社会学における演技論は、基本的には身体の社会的拘束というパースペクティーヴから与えられていることを抑えなければならない。いわゆる社会学的役割論を演技という視点からまとめれば、社会学という学の基本的部分において、こうした社会的に拘束される身体という図式が存在していることが読み取れるはず」（伊藤，1991）だということである。

これはこの後の議論とつながるのだが、身体を社会的生成物と捉えるならば、行為者をとりまく社会的・文化的・歴史的な拘束力が身体のあり方に影響を与えるという議論は自然である。これらの点から、ドラマトゥルギー論を援用して身体を描くならば、当然これらの拘束力に従属する身体観から記述することになることも分かるだろう。

さて、その次に現れる『社会／歴史と身体』の議論は、社会的・文化的・歴史的拘束力と身体の関係を重視する見地である。ここでは、M.モース、M.フーコー、P.ブルデューの３名を挙げる。

M.モースは「型の社会性」の観点から、「もっと

[1] 社会学者の間でも、「Goffman」を「ゴッフマン」と訳すか「ゴフマン」と訳すかは研究者個々によって異なる。本稿では、筆者自身は「ゴフマン」を採用するが、引用を元に記す場合は引用元の訳を採用することとする。

も本来的な技法対象であり、また同時に技法手段」である身体をめぐる技法について、その社会的/文化的拘束を明らかにしようとした。それは、例えば歩きかたや泳ぎかたといった技法が特定の社会に特殊なものであり、ポリネシア人がわれわれ（この場合、モースを含むヨーロッパの人々）とは同じようには泳がないし、われわれの世代も今日の世代と同じようには泳がなかった、とモースが述べたとおり、身体は単なる精神の従属物ではなく、行為者を取り巻く外的諸条件に依存することを示している。

身体と社会に関するフーコーの考察は、彼の著作『監獄の誕生』に代表的に見られる。フーコーは身体を権力の作用点として捉え、そこに近代的な権力の透徹を見る（Foucault,1975）。身体は権力の対象として発見され、その細部にわたって管理されて、訓練されるようになったと説く。このような身体への権力の行使を規律=訓練（discipline）と呼んだ。

一方、ブルデューは次の点から行為者の身体について近接した。何らかの行動をとる人、つまり行為者が戦略的にとる戦略的な決定が以下になされるのか。個々人は様々な局面において意識していないにもかかわらず、何らかの傾向は存在する。このような個人の行為や所作の有り様の方向や傾向を決定付ける、社会的文化的な性向をブルデューは「ハビトゥス」と名づけた（Bourdieu,1980）。
社会学の近接分野である文化人類学において最初期から身体を社会的文化的関係性から明らかにしようとしたM.モースはもちろんのこと、セクシャリティや監獄、医療などの諸問題について、規律=訓練される身体というテーマで身体を分析したM.フーコーや、ハビトゥスと日常的習慣的実践としてのプラティークの概念を導入し、主観主義と客観主義、主体中心主義と構造主義の克服を目指し、習慣化されたものと歴史性とをダイナミックに融合させることで、身体技法をめぐる社会学に新たな視点を生み出したP.ブルデューの二名もまた、ここに記しておくべきであろう。

４．身体の心理学の変遷

社会学が1970年代から90年代にかけて身体を巡る議論を重ねてきた経歴の展望を検討した。本節では同時期における心理学と身体の関連性を検討する。

心理学において身体は主として行動の文脈で理解され、1960年代の認知革命において行為への転換を示している。ここでの身体とは強化子、あるいは認知の従属変数としての身体であった。この「従属する身体」に変化が見られたのは1970年代中盤からで、①生態学的心理学における知覚の原点としての身体（Turvey,1973）、②身体性認知にける主体性の原点としての動作主体感としての身体（Evans,2016）、③教育心理学や発達心理学における主としてヴィゴツキー学派における社会文化的な学びの原点としての身体（ｅ・g,. Wertsch,1991:Engestrom, 2005）、④マインドフルネス瞑想法（Kabat-Zinn, 1990）に代表される心身一元論的な臨床心理的観点からの健康と心理的治癒のための身体の４点の変化が見られている。

こうした変化の中で、心理学と社会学は対人的なわざや遊び、パフォーマンス、協働的な学びを巡るフィールドで重なり合うようになり、方法論を含めて、新たな身体論研究の地平が検討されるようになった。先程の表１のパースペクティーヴと身体論の関係を、伊藤の論考を参考にしながら心理学の身体論を付け加えて見ると、次のとおりとなる（表２）。

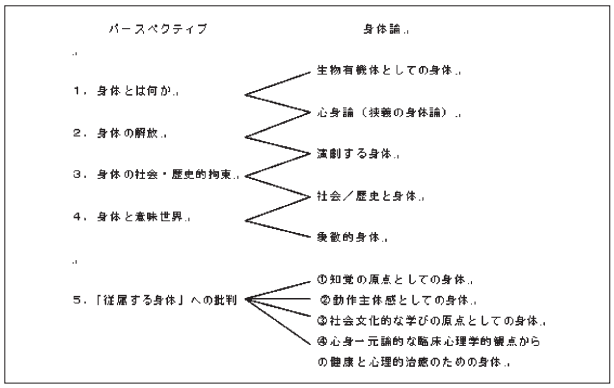

表２．社会学と心理学における身体論とパースペクティーヴの関係（伊藤（1990）をもとに筆者作成）

５．新たな身体論の地平へ
ー倉島哲の身体技法論についてー

さて、昨年の吉田ら（2016）の論文にある通り、筆者らはロシアのマーシャルアーツの一つであるシステマに着目し、システマ親子クラスでのフィールド調査を続けている。システマ親子クラスの特徴の一つとして、柔道、空手、剣道などの武術とはことなり、生徒やパフォーマーの技量を数値化・可視化する仕組みが見られないことにある。一例

を挙げるなら、段位や級といった到達度合いや習熟度を客観化する制度が取られていない点にある。

これまで吉田らがフィールドワークを通じて表出してきた疑問や違和感と比較的類似した視点から、武道（マーシャルアーツ）をおこなう人々の技や技法について論考を深めている研究者に、社会学者の倉島哲がいる。彼はいくつかの武術教室の先生やそこに通う会員などとの交流と自らの実践をもとに、その技の有効性を表象することを目指してきた。

倉島（2007）は、技や身体の在り方を記述する際の研究者の立場、つまり主観的視点と客観的視点それぞれの問題点を指摘している。前者は技の有効性を行為者の考える有効性に還元してしまい、後者は技の有効性を客観的構造における弁別的価値に還元してしまうという。そして、これらの方法に代わるものとして相互身体的視点を提出した。具体的なフィールドでの経験から、倉島がどのような機会に相互身体的判断[2]を行うことが出来るか考察することで、この判断の可能性の条件を明らかにしている。倉島が行為者の技の有効性を対人的な視点を含む相互身体的に判断することが出来たのは次の二点であるという。

まず、倉島自身が行為者と同じ技を身につけるべく努力する過程で、自らの振る舞いが追求すべき有効性の微分を経験した時、つまり有効性の認識が漠然とした観念的なものから、詳細に定義された具体的な身体的ディテール[3]に依拠して追求すべきものに変化したときである。しかし倉島は、行為者として同じ技を身につけるべく努力していないときでも、その行為者の技の有効性を相互身体的に判断することが出来たという。技の有効性を相互身体的に判断できる範囲は、特定の技の種類にも、特定の流派にも、生身の身体による実践一般にも限定されなかったのだという。これが二点目である。

これらを総合的に判断すれば、技の有効性を相互身体的に判断するための条件は、観察者と行為者が同じ技を身につけるべく努力しているか否かを問わず、ただ、観察者が何らかの有効性を追求するために依拠すべきものとして特定できた身体的ディテールと同じものを行為者の振る舞いに認めることであるという。観察者は、この身体的ディテールにおいて、社会的意味を帯びた身体でも、実践する生身の身体でもなく、相互身体が行為者と共有されていることを認めるのであり、相互身体的判断のためにはそれだけで十分だと結論付ける（倉島，2007）。

倉島の説く相互身体的判断という概念は、それまでの身体に関する諸理論と一線を画す。それまでの諸理論が技の有効性を表象できなかった理由は、模倣する人（弟子･生徒）による模倣対象者（武術の師匠）の行為の有効性に対する相互身体的な判断が模倣関係を規定する重要な要因の一つであることを理論化していないからであるという。そのため、こうした模倣関係は観察者が読み込んだ客観的構造のうちに固定され、技の有効性はこの関係によって一方的に規定されるものとして捉えざるをえなくなる。そのとき、技の有効性は、客観的構造によって表象可能な限りの有効性に還元されてしまうのだという。

ここで倉島が目指しているのは、当然技の有効性を客観的構造で表象することではない。実証主義的方法論と通底して、行為者のもつ意味世界の全体性を部分的な断面から描写することにほかならない。倉島が勝つために技を習得するという意図を持って、フィールドである教室に通っていたのだが、そこで得られた自身の経験と感覚を社会的価値観や文化的習慣等といった外在的構造から身体を語ることはしていない。倉島は武術教室の先生との稽古の中で、技の有効性を相手との駆け引きや関係性のなかで生成される相互身体的な関係性の中に見出す。

ここで重要なのが、相互に関わり合う中で自分の身体と主観的世界が当然変化するが、それとともに自分を取り巻く周囲の環境やリアリティもまた変化するという点であろう。つまり、稽古の中で技を会得しようとする行為者の身体が独立して存在して、体の様々な部位を動かしたりその時の感覚を一人称単数的に読み解き感じたりすることではない。先生として技を伝える者、対戦相手として自分のもつ技を披瀝する者、周囲でそれを観る者、そして当然技を繰り出す私という主体が織

[2] 相互身体的判断とは、自分と他者との間に等しい身体（=相互身体）が共有されているという直感的判断のことをさす（清水，2010）。

[3] 身体的ディテールとは、例えば靴を脱げないようにする脚の動かし方や転ばないための体勢維持の仕方など、その場や状況に応じて行為者がとる微細な身体の実践だと考えられる。

りなす共同・協働的実践の中で、身体のリアリティを定位する重要性を倉島は指摘しているのである。

６．考察

これまでの身体論の系譜と倉島の身体技法論との差異の中で、本稿の目的と照らし合わせて重要と思われる点は次のとおりである。

デカルト的心身二元論の超克を目指して身体論が変化してきたことはこれまで述べたとおりであるが、その身体のあり方を分析し記述するためには、行為者の振る舞いや活動の所作をどの視点から切り取るかについて相対化し、批判的に検討し続けなければいけない。そのためには、実証主義的観察から得られる定量的データへの絶対的信頼という態度から、実証主義的な態度への批判から現象学的な行為者の主体的な意味解釈から世界を切り取る方法論が提起された。これによって、「生きられる身体」への接続が目指されたはずである。この「生きられる身体」を主観的に描写し記述することで、崇高で絶対的な精神＝思考による従属的存在である身体という主従関係に一定の楔を打つことになる。

行為そのものをどのように切り取るかという問題は、実は研究者が社会や人々をどう捉えるかという認識の問題と密接に結びついている。そのため、行為者の行為を社会的に拘束された現象として捉えて分析することは、行為主体の活動を社会との相互作用の帰結として捉えるという陥穽に落ちかねない。

そこで、倉島は５章で見てきたとおり、行為者のみの主観的な意味世界の変化だけではなく、行為者を含めた相互に関係する主体を全体として包括する世界の変化について考察する方向をとる。そこで、武術の技を身につけるという実践の中で、相互身体的な判断によって技の有効性が双方向的・相互作用的に決定されており、それゆえ協働的実践の中で身体的リアリティが生成し変化することを指摘した。

筆者らが現在もおこなっているシステマ親子教室でのフィールドワークにおいても、倉島の経験した武術教室での実践と共通するところは多い。しかし、倉島身体論をそのまま適応することには注意が必要だろう。まず、倉島身体論が導き出す要点は、実践者でありフィールド調査者である「自分」の内的主観的感覚を、武術の技やコツを教える先生や試合の対戦相手といった「他者」との主に２者関係の中での意味世界の変容を記述するものである。それに対して、システマ親子教室では、教室の先生が主催する道場の中でその意味世界の変化を感じ取り実感する主体は「子ども」であり、その変化を他者として感じ取りながら何らかの評価基準で子どものシステマ経験を評価するのが「親（保護者）」であり、そこに同様の身体活動を経験しながら先生・子ども・親の３者とそこでのシステマという実践を観察する私たち「調査者」という４者の視点が存在する点にある。困難さの核心は、主要な調査対象者である子どもたちの主観的意味世界を捉えることである。具体的には、子どもたちの内的世界を詳細かつ微細に説明できるのは子どもたち自身であるのだが、子どもたちが研究者の求めるように表現できるかどうかは分からない。その上で子どもたちの変化をその保護者に求める場合、当然のことながら「保護者から切り取った子どもの有り様」という解釈的な客観情報をもとに、子どもたちの主観的な意味世界を解釈するという倒錯的な状況に陥る可能性が高いのだ。

このような状況を打破する一つの方法として、質的心理学を提唱している鯨岡（2013）のエピソード記述という方法の利用も考えられるだろう。鯨岡もまた現象学の方法論を援用し、保育現場における保育者の対応や心理的状況を主観的に記述する「エピソード」の有効性を認める。鯨岡は、行動の様態やその結果などを行為者の意図にもとめる実証的な心理学的方法論によって保育現場で起こる活動の説明を求めない。その代わり、保育者たちが日々の出来事を記述するエピソードという主観的記述の中に、子ども・保育者・保護者といった保育現場をとりまく環境の意味をすくい取ろうとするのだ。鯨岡の手法は、観察対象でもあるが行為主体でもある子どもの活動を切り取る方法として、今後検討する余地があるように思われる。

ともあれ、筆者らのフィールド調査によるエステマ親子クラスの分析において、この活動の効果や身体操作のあり方を、心理的側面からの因果関係のみで説明したり、社会的文化的文脈から行為を分節化して解説したりする方法のみで分析するつもりはない。筆者らが着目するこの活動の重要な点は、行為者の主観的世界の意味変容とフィールドに集う人々の相互作用に存在する。それゆえ、倉島が提唱する相互身体的判断という概念が、上述の４者が関係を取り持つシステマ親子クラスで

の実践を解きほぐす端緒になるのではないだろうか。その意味で、他者と交流しながら身体的感覚が変容するという共同・協働的シチュエーションを活きる限りで、協働的実践で生成する相互身体的判断という視点を積極的に応用できると考えている。

このようなミクロな視点と感性からの問いかけを橋頭堡とし、これからの心理学と社会学の実践的方法論に架橋することで、システマ親子クラスでの分析に新たな知見を加えていきたい。

参考文献

Bourdieu,P.（1980）*Le sens pratique*, Minuit.（ 今村仁他訳（1988）『実践感覚１』みすず書房）

Foucault,M.（1975）, *Surveiller et punir*, Gallimard.（田村淑訳（1977）『監獄の誕生』新潮社）

Mauss,M.（1968）*Sociologie et anthropologie*.（ 有地亨・山口俊夫訳（1976）『社会学と人類学』弘文堂）

ニック・クロスリー（西原和久, 堀田裕子（訳））（2012）『社会的身体:ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』新泉社

ブライアン・S.ターナー（2005）　身体の社会学の過去そして未来 : 研究アジェンダの確立『身体の社会学 : フロンティアと応用』世界思想社

伊藤公雄（1991）身体論の系譜『ソシオロジ』36(1), 6-16, 182

稲垣正浩（2010）〈21世紀の身体〉を考える—「近代的身体」からの離脱と移動『「スポーツする身体」とはなにか : バスクへの問い・part1.』竹谷和之編著, 叢文社

鯨岡峻（2013）『なぜエピソード記述なのか:「接面」の心理学のために』東京大学出版会

倉島哲（1997）<書評論文>社会学理論における身体観の二元論 : 自然主義的身体観と社会構築主義的身体観を超えて『京都社会学年報』5, 215-222

倉島哲（1999）はじまりの認識論のために : モース『身体技法論』に見る認識の発生論,『京都社会学年報』7, 179-192

倉島哲（2001a）武術教室における言語と実践:型稽古の記述のこころみ、『スポーツ社会学研究』9, 71-82,135

倉島哲（2001b）情報化と身体の変容:身体的メディア・リテラシーに向けて、『京都社会学年報』9, 165-176

倉島哲（2007）『身体技法と社会学的認識』世界思想社

倉島哲（2009）身体技法の習得と身体の抵抗—マンチェスターの太極拳を事例として『人文学報』98, 81-116

倉島哲（2012）有効性から身体技法を捉える、『ソシオロジ』56(3), 137-147

桜井厚（2002）『インタビューの社会学』せりか書房

桜井洋（1997）フーコーと主体の系譜学『クロニクル社会学』有斐閣, 152-165

佐藤郁哉（2006）『フィールドワーク増訂版』新曜社

清水諭（2010）<書評>倉島哲著『身体技法と社会学的認識』社会学評論 61(2), 218-219

鈴木智之（1997）ブルデューあるいは二重の絶縁の戦略『クロニクル社会学』有斐閣, 257-270

竹谷和之（2010）プロローグ『「スポーツする身体」とはなにか : バスクへの問い・part1.』竹谷和之編著, 叢文社

西川知亨（2003）ゴフマンの『ドラマトゥルギー論』『シカゴ学派の社会学』306-314, 世界思想社

速水奈名子（2015）アーヴィング・ゴフマンの社会学『触発するゴフマン』1-25, 新曜社

速水奈名子（2005）身体社会学におけるゴッフマン理論『身体の社会学』163-182, 世界思想社

宮島喬（2012）『社会学原論』岩波書店

高橋由典（1986）自己呈示のドラマトゥルギー,『命題コレクション社会学』43-50, 筑摩書房

山本雄二（1990）社会学とはどういうものか『基礎社会学[第２版]』11-26, 福村出版

吉田梨乃、守谷賢二、江南健志、小野淳（2016）システマの定義と展開に関する質的研究 : ミカエル・リャブコへの半構造化面接『千里金蘭大学紀要』13, 21-30